椎葉村を訪ねて

――地理と歴史の旅――

矢野弥生

はじめに
一　全国八位の広大な面積の村
二　村民所得の四十五％は林業
三　椎葉の観光と歴史
四　二十年間で人口半減の村
五　渓谷とダムの椎葉
（以上本号）

はじめに

昭和五十六年八月五日―七日の三日間にわたって開催された第二回九地研宮崎大会に参加したあと、七―八日にかけて単独で耳川最上流部・九州山地のど真ん中にある東臼杵郡椎葉村を訪ねた。椎葉や米良地区の山村は平家の落人伝説や菊池氏の残党伝説をもって、隠田集落的性格がみられる地域である。藩政時代は米の生産がほとんどなく、かえりみられなかったところである。現在は典型的な過疎地域であるが、林業経営・しいたけ栽培・畜産（和牛）・茶栽培などに力を入れ・最近では観光にも力を入れて、振興をはかろうとしている。

一泊二日の短期間の旅であるが、現地の印象や見聞メモ・若干の資料をもとに過疎問題に苦悩する椎葉村の姿・山村問題の

一端を報告したい。なお、見学に際してご協力を頂いた椎葉村当局、ことに住民課の椎葉久太郎氏には資料等で格別の便宜を受けた、紙上をかりて感謝の意を表します。

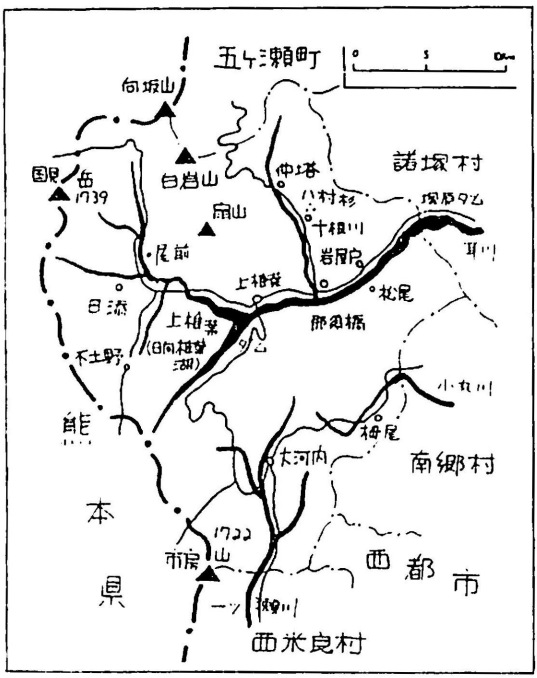
一　全国八位の広大な面積の村

日向市からバスで三時間

九州山地のど真ん中にある椎葉村に入るには、国道二六五号を小林からと高千穂から、国道三二七号を日向市から入る三通りのコースがある。私は九地研の宮崎県南部地方の巡検が終了した八月七日の午後・宮崎駅発一三時三五分・博多行きのにちりん二四号にとびのり、日向駅で下車・駅の裏側にある日向バスセンターに行く。

日向バスセンターで、上椎葉行きの時刻表をみると、最終便の一六時二分に間に合う。辺地の山村だが、日向市からのバスは午前三回・午後三回の六往復あるので便利。今夏は九地研発表の準備等で、椎葉については事前調査の暇もなかったので、今夜の宿が心配になった。バスの切符売り場の娘さんに、「今から椎葉に行くんですが、予約しなくても旅館はありますか」ときくと、「お客さん、心配ないですよ。椎葉は旅館や民宿が多いから。」という返事があった。とにかく、心配なさそうな

図1　椎葉村略図



ので、行き当たりばったりで行くことにした。

最終便のバスも満席だったが、乗客は観光客は少なく・地元の人々がほとんど。日向市からバスで三時間・上椎葉まで約七五キロ・耳川沿いにある大内原・西郷・山須原・諸塚・塚原・岩戸屋などの多くの発電所を見ながら上椎葉へ。

途中・塚原を過ぎるころから、耳川の河谷が狭く、深くなり、道路から垂直に落ち込んだ崖・清烈な流れ、切り立った山肌など渓谷美が車窓から見られるようになる。曲折した道路・何度も急ブレーキ。窓下は路肩からはみ出し、一寸したスリルも味わえた。やがて日向市を出てから二時間も過ぎたころ、道路の左側に「椎葉へどうぞ」と村役場がつくった立札が見えてきた。それから四〇分ほどしてから、国道三二七号の終点・郡須橋で国道二六五号に入り、橋を渡れば椎葉村の中心集落である上椎葉。

深い谷・人家をのむ

椎葉の各地をあるいてみると、いかにも山が深いという感じがする。それは山が高いからではない。村内の主峰である市房山（一、七三二米）・国見岳（一、七三九米）でさえ、二、〇〇〇米をこえてはいない。それは地形が壮年期であって、深い谷をなし、平地が皆無に近いことや人家が非常に少ないために、そんな感じを与えるのではないかと思う。まさにその情景は深い谷が人家をのむという表現がぴったりする。

山頂部や中腹部に多い集落

椎葉の集落や耕地・道路は山頂付近や中腹に多いのが目立つ。これは山頂部付近が傾斜がゆるやかで、谷壁の傾斜が急なためである。また、この地域には平担地が乏しいために集落は各地に分散し、各家屋は目の字型が多いようである（後掲図2参照）。

椎葉村における集落の高距分布についてみると、表1のようになる。この表は椎葉村と地形が同様である米良地区について比較した調査である。二万五千分の一の地形図で調査したもので、この表でわかるのは、先ず東米良は二〇一―三〇〇米まで

の高さにある集落数四七の三四%であるのに対し、西米良は六一集落の二八%、椎葉は七〇集落のなかで一つもない。これは地形の海抜高度が宮崎平野にもっとも近い東米良がもっとも低く、西米良・椎葉の順になっているからで、集落も土地全体の高さに比例している。三〇一—四〇〇米までは東米良が二六%、西米良三九%、椎葉が一%で、西米良がもっとも多い。

四〇一—五〇〇米は東米良が二三%、西米良一〇%、椎葉九%で、東米良がもっとも多い。五〇一—六〇〇米は東米良一五%、西米良八%、椎葉三二%で、椎葉がもっとも多く、この高度に集中している。

六〇一—七〇〇米になると、東米良はわずか二%西米良一二%・椎葉は二七%と圧倒的に多い。七〇一—八〇〇米では西米良三%、椎葉一三%、八〇一—九〇〇米では椎葉のみが一七%を示している。以上をまとめてみると、各地区でもっとも多く集まっているところは、東米良は二〇一—三〇〇、西米良は三〇一—四〇〇、椎葉は五〇一—六〇〇米ということになる。

米良と椎葉との比較では、椎葉が圧倒的に集落高度が高いことになり、七〇〇米を越える高さの集落は、西米良で二、椎葉で二二もあるが、この高度での生活は、平地の住民にとっては想像もつかない生活であろう。農業を行なうにしても（畑作であるが）、高度が高くなるほど不利になってくるわけで、生活の厳しさが累加されるからである（「日本地誌」二一巻）。

宮崎市の約二倍の広さ

表1　椎葉山地・米良山地の集落の高距分布

	椎葉		米良			
			東米良		西米良	
	集落数	割合	集落数	割合	集落数	割合
201 ～ 300m	—	—%	16	34%	17	28%
301 ～ 400	1	1	12	26	24	39
401 ～ 500	6	9	11	23	6	10
501 ～ 600	22	32	7	15	5	8
601 ～ 700	19	27	1	2	7	12
701 ～ 800	9	13	—	—	2	3
801 ～ 900	12	17	—	—	—	—
901 ～1,000	1	1	—	—	—	—
計	70	100	47	100	61	100

（資料…下村数馬氏による）

ここで、椎葉村の位置や自然環境について概要をのべる。村は宮崎県の西北・東臼杵郡の西部・九州山地の中央部に位置し日向市から約七五キロ、東西二七キロ、南北三三キロで、図1で示すように、西側は「五つ木の子守唄」で名高い熊本県球磨郡五木村の隣境五家荘と背中合せの位置にあり、深山と幽谷とが重なり合っている。

総面積は五三七・二九平方キロで、その規模は北海道及び市を除く町村数二四二九のうち八位の広い村で、村内をまわってみるとなるほど広いと実感が湧く。また、宮崎市の約二倍の広さに五四七八人（昭五五）、小中学校は分校を含めて一三校もあるというから、その規模の広大さがわかる（大分県の南海部郡宇目町の約二倍の広さ）。面積の九五％は山林原野で占められ、典型的な山村である。九州屈指の国見岳・市房山をはじめ、一、〇〇〇米をこえる山岳があり、これに源を発する耳川・小丸川が西から東へ流れ、一ツ瀬川は北から南へ流れている。これらの三河川には、いくつかの支流が合流して、深い谷を浸蝕し、豊富な水量は下流で水力発電に利用されている。

中生代の地層が分布

椎葉村の地質の大部分は中生代四万十層群に属しており、断層や褶曲が多く複雑な山地をつくっている。また、砂岩・粘板岩等は西北部を中心にあり、いずれも北東から南西に並走しており、多量の石灰岩が埋蔵されておるほか、マンガン、銅等が戦前から、戦後にかけて産出された。

二　村民所得の四五％は林業

低い農業の占める位置

今回の旅行は一泊二日の慌しい日程で、実際に一日ぐらいの調査・見学しかできなかったために、希望していた農家訪問の機会ももてなかったので、村役場の提供資料や参考文献、若干の現地での聴取をもとに、椎葉村の農林業の実態について、概要をのべてみたい。

椎葉の主産業は林業で、就業人口の約三分の二を占め、産業別村民生産（昭和五二）をみると、村民所得の四五・一％が林業所得で、農業所得は三％と、農業の占める位置はきわめて低い。また、昭和五〇年度の農林業センサスによると、販売収入第一位の農家数は椎茸六二八戸、肉牛九六戸、米一〇戸、その他五戸で、よく山村の性格がでている。

表2・3で明らかなように、一戸の平均経営耕地面積は〇・三六ヘクタールの零細経営で、極度に狭い田畑で、自給できる程度の作物を作り、現金収入は木材・しいたけ・肉牛などの販売代金や山林・土木工事などの稼ぎに頼って生活している農家が一般的のようである。また、サービス業や建設業も林業と深くかかわっていることも、椎葉の地域性をよく物語っている。「日向地誌」（明治初年）

表2　農家数と農家人口

年次	農家数					農家人口		
	総数	専業農家	兼業農家					
			総数	第1種兼業	第2種兼業	総数	男	女
昭和45年	915	104	811	430	381	4,755	2,346	2,409
50	876	133	743	296	447	4,280	2,095	2,185
55	822	131	691	181	510	3,661	1,810	1,851

（資料……農林業センサス）

表3　経営耕地面積

年次	総数	田	畑	樹園地			
				果樹園	茶園	その他	計
昭和45年	421	227	184	7	3	—	10
50	379	210	144	15	9	—	24
55	300	182	98	10	10	—	20

（資料……農林業センサス）

表4　主要農林産物生産状況

年次	米	麦	雑穀	豆類	いも類	椎茸	くり	造林用苗木
	t	t	t	t	t	kg	t	千本
昭和52年	519	34	4	45	360	170,000	13	750
53	548	23	5	35	391	175,000	22	568
54	491	6	3	37	317	157,000	16	1,102

（資料……普通作物市町村別統計）

によると、椎葉村は「田圃稀少自カラ養フニ足ラス故ニ山背険阻ノ地ニ就林莽ヲ芟リ草茅ヲ焼キ禾稗大小豆蕎麦ノ類ヲ植ヘ一年如クハ二年地ヲ易テ作リ以テ食料トス然トモ獣害極多シ之ヲ防ク術或ハ銃炮ヲ発シ或ハ陥阱ヲ設ケ護衛少シクモ怠ル能ハス民業甚難シ」とあり、耕地が少なく、農業の中で焼畑がいかに重要な意味をもっていたかがわかる、

多い部落の共有林

保有山林規模別農家数をみると、表5に明らかなように、一〇ヘクタール以上の所有者が全体の六四・八%もあり、他地域の山村に比べると多いといえる。また、五〇ヘクタール以上の大規模山林所有者は五八戸もある。さらに、この村の特徴として表6でもわかるように、国有林や公有林の割合が全体の二八%と比較的多いこと、また村役場で聴取した話によると、椎葉は部落有林が多いということである。これも江戸期の古い慣行から五人組による共有林も多く、その他に二人組・三人組・八人組・一五人組などの共有林があるそうである。その中で、最も所有山林面積が多いのは一五人組共有林で、一〇〇ヘクタールほどの面積を有するものもあるという。

表5　保有山林規模別林家数

総　数	0.1～1	1～5	5～10	10～20	20～50	50～100	100～500
807	17	145	123	217	247	52	6

（資料……昭和55年農林業センサス）

表6　保有形態別森林面積

保有形態別＼区分		総面積	立木地			未立木地			人工林率
			人工林	天然林	計	伐跡地	未立木地	竹林	
国有林		11,594	3,449	7,975	11,424	107	63	—	29.7%
公有林	県有林	1,536	1,121	374	1,495	19	22	—	72.9
	村有林	1,534	1,288	220	1,508	8	18	—	83.9
私有林	個人	20,455	11,651	8,120	19,771	88	94	502	56.9
	会社、社寺有林	8,980	4,195	4,642	8,837	2	99	42	46.7
	その他	7,252	5,251	1,850	7,101	—	101	50	72.4
総計		51,351	26,955	23,181	50,136	224	397	594	52.5

（資料……昭和53年耳川地域森林計画書）

椎葉さんの伝統的焼畑を利用した造林

「みやざき新風土記」（昭和五五）に紹介されている椎葉村の上層農家の林業経営について、少し長いが、引用してその実情を探ってみよう。『宮大農学部藤原宏志助教授の紹介で、向山日添（むかいやまひぞえ）の椎葉秀行氏（五五歳）宅を訪れた。上椎葉から、ダムのへりをまわり、尾前の手前で左へ折れ、地区民の汗の結晶である林道をのぼり上った所が、日添で、車で約一時間かかる。現在も、毎年数十アールの焼畑を続けている、全国でも珍しい農家だ（中略）。全国的にも、新潟・長野県境の秋山郷（あきやまごう）で一昨年から学術実験用焼畑が復活したぐらいで、椎葉さんの焼畑は貴重な例である。

「約六〇アールの水田に米を作り、主要な現金収入は、間伐材・椎茸・肉牛などの売却代金である。私たち夫婦と長男（二五歳）夫婦で、仕事を分担している。焼畑は、高等小学校卒業の時から、休みなく毎年続けている。昔は食料生産のためだったが、今は造林のためで、そこでの作物は割にあう収入ではない。焼畑にすると、クヌギ（椎茸原木）などの生育がいいのと耕作中とその後二―三年は下刈り作業をせずにすむこと、学術的に貴重だという先生方の激励があるからつづけている。

一年目ソバ、二年目はクヌギや杉を植えてその間にヒエ、三年目はアズキ、四年目は大豆を作り、五年目から放置して、クヌギや杉材として仕立てる。この作順を入れかえると、うまくいかない。やぼ切り。火入れ・種まき・除草・とり入れ・いずれも急傾斜での夏仕事だから重労働で、特に三、四年目の種まき時にクワでこさぐのがきつい。長男の代になったら、もう止めるだろう。

現在の持山は約四〇ヘクタールで、杉・ヒノキ・クヌギが中心である。近年村外の山買いがはいっているが、部落の人達とも、「椎葉の山を大事にして、自分達で守らんといかん」といつも話している。

家から一五分位歩いた所に八月初めに火入れした焼畑があった。見上げる斜面いっぱいに「蒔いて七五日の夕飯に間に合うというソバが、七センチ位にいっせいに伸びていた。』とあり、伝統的焼畑をうまく利用した造林法が報告されている。

那須さんの合理的造林法

もう一軒の農家の林業経営について紹介しよう。『中瀬元平椎葉村教育長の紹介で、那須伝氏（四六歳）宅を訪れた。上椎葉から車で約二五分、小さな谷をへだてて、有名な利根川神社の八村杉（やむらすぎ）が、その樹齢八〇〇年の雄姿をすぐ目の前に見せている。

「毎年六月一日が田植、それがすむと造林にとりくむ。米は自家消費分だけで、椎茸は五五〇キロ（約二六〇万円）生産した。肉牛六頭は父がめんどうをみている。椎茸と間伐材の販売代金が、主な現金収入。高等小学校卒業記念樹として、祖父と父につれられ三〇〇本植林したのが造林のきっかけになった。昭和二十八年に家を建てゝ昭和三十年から本格的にとりくんで来た。当初、毎年一〇〇〇本ずつ植えて、一九六四年（昭和39）に四〇ヘクタールの山林を経営しており、杉四〇、クヌギ一五・ヒノキ三ヘクタールになっている。

三〇年たっても、全伐はせず間伐をしてそれを売り、五〇—六〇年はおいておくつもりだ。化学肥料や鶏糞を、毎年計画的に施肥しており、成長していく木を見るのは何よりの楽しみである。私達夫婦と、高校の林業科を卒業した長男の三人で山に入り、母が主として家事を受けもつ。朝五時半起床、雨や雪でも仕事は休まない。

話をする那須さんの体から、先祖から引きついで来たという山への情熱がほとばしる。朝夕みつづけて来た八村杉も、その力を与えたのかも知れない。

椎葉流の伝統的焼畑を利用した造林・那須流の合理的根性造林と、経営の仕方にちがいは見られるが、「椎葉は山で生きる村だから、山を大切に」という信念・仕事に対する熱を、杉やクヌギと共にちゃんと後継者も育てている共通点を見出した。

那須さんが笑顔で、「すこしぐらい風邪を引いても、山にはいると治ります」と話した言葉が、椎葉の山の青さなのである。』と、代表的な、上層農家の林業経営について紹介している。さらに、この上層農家の共通点をあげると、農・林の複合経営であり、農業（食料自給）に基礎をおき、人件費を無視した（自家労働だから人件費が採算に現われない）林業経営をしていることである。これは、日本の各地域の山村で一般的にみられる農民的山林経営の特徴を示している。

三　椎葉の観光と歴史

多い民宿や旅館

中心集落の上椎葉にバスで到着してびっくりしたことは、日向市から三時間もかかった山深い里に、民宿や旅館が実に多いことであった。わずかに切り開かれた狭い道の両側には、旅館・民宿・みやげ物屋・食堂・商店・村役場・病院などがほぼ一キロぐらいに一列にすき間もなく並んでいる。崖下に支柱を突き出した家並がつづく。

バス停に最寄りの「大八旅館」に泊った。金曜日のせいか、宿泊客は私ひとりだった。階下は食堂になっており、宿泊費は道路側が四、〇〇〇円、河谷側が五〇〇円高い四、五〇〇円という。宿の黒木姓の女主人の話では、土曜日が夏場は一番客が多いという。また、上椎葉を中心に四キロ四方には民宿・旅館が一三戸もあるということだった。村内には旅館二〇戸、民宿一四戸というから少し乱立気味のようだ。

旅館の献立は山の幸が特徴で、ヤマメの塩焼き、コンニヤクのすみそあえ、トリの砂ずりのサシミ・シイタケの煮物、イノシシなべ（冬）、ソバ汁など山宿の実感がこもる。私は山菜料理にしようちゅうが合うようなので、二合ほど飲み、十一時ごろまで旅館の主人と雑談して時をすごす。

役場の観光課の話では、年間椎葉を訪れる観光客は一五―六万人はあるだろうという。とくに春から秋までが多く、夏がピークという。また、県内がほとんどだが、県外からも若干あるということである。上椎葉にある那須大八郎と鶴富姫との悲恋哀話で名高い「鶴富屋敷」（国の重要文化財）を見学した際に、見学名簿を見せてもらったが、それには、宮崎県内が圧倒的に多いが、県外では熊本・福岡が多いのが目立つ。本州では神奈川県からの観光客もあった。

観光に力を入れる村当局

村当局は過疎脱出のきめ手として観光開発に努力しているという印象をえた。役場を訪問したが、助役さんや総務課長さん

が直接応対してくれ、村の様子について私のぶしつけな質問にも快く答えて頂いた。また、私が求めた資料などもできる限りご協力をえた。村の出かせぎの資料は十月に調査するというので、後日、村の調査結果が出た十一月に郵送してもらうなどの格別の便宜をはかって頂く。

村の観光開発も最近始めたばかり、昨年は国鉄の周遊指定を受け、現在総合運動公園、同じ平家の里の熊本県五家荘への林道も建設中で、国定公園指定の見通しもついたという。役場の説明や観光パンフレットから考えられる椎葉の観光の目玉は、鶴富屋敷・椎葉湖（上椎葉ダム）・八村杉のようだ。さらに、最近では観光地として扇山と白岩を結ぶ霧立越登山コースも売り出しているようだ。

那須家住宅（鶴富屋敷）

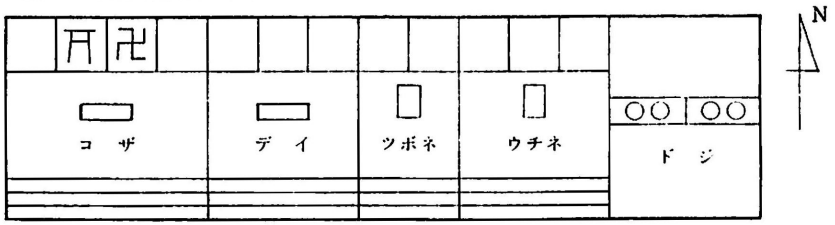
観光開発と自然の調和はむずかしい問題であるが、急激な観光開発による、地域的特色を無視した俗化は長い目で見て、マイナス面が多い。上椎葉の商店街にしても、他地域と異なった個性を打ち出してもらいたい。

奥行がない、併列型の民家

村をあるいてよく観察されることは、急傾斜の地形で、平地がきわめて乏しいためにどの家も目の字型、すなわち部屋が一列にならんだものが多いのに気づく。耳川上流にあり、舟はもちろん、筏も通じない。三反とつづいた平地のないことは、傾斜地をきりひらいた民家の形式に、その特色がよくあらわされている。

すなわち、部屋が一列に横にならんでいて、奥行がない。入口の土間をドジといい、それからデイ・コザの二間がある。鶴富屋敷など少し大きな家では、この二間のあいだに中の間という部屋がある。表側には縁側がついており、三間とも表から三分の一くらいのところに中しきりがあって、貴賤の座席を区別している。中の間には奥

図2　那須家住宅平面図



（資料……現地調査による見取り図）

○構　造……桁行　25米09糎（82尺8寸）　○形　式……一重寄棟茅葺東面庇附属
梁間　8米64糎（28尺5寸）

へながい炉がついている。

椎葉ではむかし二本差・一本差・鎌差の三つの家格にわかれており、とくべつの日にはすわる席がきまっていた。しかし、日常のくらしには二本差も鎌差も差別なく、一様に山かせぎで生計をたてていたのである。（「風土記日本」平凡社）。

奥行がない、併列型の民家を全国的にみると、この形式は十津流域の紀和山地、吉野川上流の祖谷川・那賀川上流など剣山周辺山岳地域・五箇瀬川上流高千穂・耳川上流椎葉、球磨川上流五家荘など九州山脈地域に分布している（「地理学評論」三四巻の五号）。

椎葉村の沿革

古い時代の歴史は明らかでないが、豪族那須氏が向山（不土野）城におって支配したが、元和のころ（一七世紀初め）から幕領になり、明暦のこと（一七世紀半ば）から人吉藩領となった。明治以後は日田県→人吉県→延岡県→美々津県→宮崎県→鹿児島県→宮崎県と所属が変わった（「日本地名大事典」朝倉書店）。明治以後は、宮崎県に編入されるまでは何度も管轄の変遷があり、西臼杵郡に属した。

明治維新前は、下福良、不土野・大河内・松尾の四か村にそれぞれ庄屋をおいていたが、明治五年庄屋制を廃止し、戸長を置いた。

明治二二年町村制発布に伴ない、四か村を合併し椎葉村となり、昭和二四年四月には行政・交通等の不便により、その管轄を東臼杵郡に編入して今日に至っている（「しいば」村勢要覧）。椎葉の地名の由来は、昔、平宗久が家の壁をシイの葉でふいたことから起こったという。

江戸期までは独立国

ここで、椎葉を理解するうえで必要なので、少し長いが、二・三の文献から引用し、その歴史背景について概要をのべる。

椎葉は九州地方では熊本県の五家荘や宮崎県米良荘と共に平家落人の伝説をもつ家が多い。しかし、そうした敗残者ばかりが人目をのがれて山中におちついたわけではなく、椎葉には残党の討伐にきたという那須氏もおちついている。そして早くから土豪化したことは、慶長二（一五九九）年の朝鮮征伐の軍役赦免の文書に、那須平右衛門、那須助郷の名を見いだすことからも推察される。

なお、椎葉、米良地方には、那須氏のほか、深水（ふかみ）、桑原、米良など二〇の姓を見いだすが、これらの家はそれぞれ独立の型をとっていて、江戸時代の初めまでは他の大名に支配せられることはなかったいう（「風土記日本」平凡社）。いわば、椎葉村は小独立国であった。

検地拒否や課税反対の歴史

平和な椎葉の歴史が大きく転換するのは、慶長末（一六一四）年、幕府領となり、米良は米良氏領のまま相良氏（さがら）の支配に属するようになって以後である。それから、椎葉では住民が大きく動揺しはじめる。その事情は明らかではないが、検地拒否や課税反対が原因ではなかったかと思われる。

そして、支配者相良氏にたいしてたえざる反抗がこころみられたようで、多くの人が隣の有馬領へ逃散した。明暦二（一六五六）年に那須勘右衛門・同小平次・同助兵衛らはじめ男女多数がかけおちしている。幕府からはその帰住説得に苦心しているが、その結果は明らかでない。

口碑の伝えるところでは、住民のたえざる反抗に手をやいて、相良氏は椎葉の住家をことごとく焼き、また一〇歳以上の男子をみな殺しにしたともいわれている。そのように力をそがれて、はじめて平和になったのだが、米良だけは米良氏の勢力が強く、一領国を形成し、相良氏の客分として幕末にいたった。（「風土記日本」平凡社）。

他地域から隔絶された、九州山地で最も深い山里も、近世封建制が確立した江戸期には領主の支配下におかれ、受難の歴史があったのである。

苛酷な山村の生活

『延享三年（一七四六）椎葉山大河内から一山の状態を幕府に提出した記録のなかに、「椎葉山は東西七里余・南北十里余至って深山幽谷の地にて、四境とも山続き、夏、毒虫多く、困窮の所なり。」とあって、その環境の悪条件をのべている。当時大河内は二四〇戸、一、四八八人で、耕地としては畑九町六反、焼畑八八町四反にすぎず、田は皆無であった。焼畑というのは、樹木を伐採したあとを焼いて粟・稗・芋などをつくるもので、毎年耕地をかえるのである。住民は粟・稗・芋などを常食とした。麦や甘藷、そしてまれにきわめて少量の米をまぜて常食とした日向の他郷の百姓たちにくらべて、食生活がいかにまずしかったかがわかる。

延享三年の報告はつぎのようにつづく。

「稼に男女とも木を伐り、焼蒔の畑作を専らにす。……又は木の実を拾い、葛蕨の根を掘り糧とし、畑茶を取り渡世の助とす。冬、雪深し。男は熊・羚羊・猪・鹿を猟し、その肉は食し、皮は売る。女は布を少々織り、生綿は織らず、冬も帷子を上着とす（中略）」これからすると、まさに椎葉の住民は採集と狩猟の生活を送ったのである。また、椎葉山は地面悪しく、土薄にて砂利がち、かえって困窮のところなり。寒は強く、暑は弱し。

ともあるようにまったく不毛そのものであった。

椎葉山の草高はわずかに五九〇石余であるが、貢納の対象となるものに七カ所の鷹巣山があった。鷹巣とは、巣鷹ともいい、巣ごもりした鷹のことである。鷹狩に用いる鷹はその巣からとって飼養するもので、江戸幕府は法令で鷹の私養を禁じ、かならず支配所に報告させ、その許可で鷹をおさめて鷹狩に使うのである』（「宮崎県の歴史」山川出版）。

日向地方は猪の狩場として有名で、狩りの故実がよく伝えられ、狩の作法が最後までよく守られてきたという。民俗学者、

柳田国男は二度も椎葉を訪れ、『後狩詞記』を著わし、彼の民俗学の出発点となったという。

『後狩詞記』に柳田国男は次の歌をよんでいる。

椎葉村を懐ふ

立かへり又みゝ川のみなかみに
いほりせん日は夢ならでいつ

平家落人の伝説

上椎葉の中心街から少しはずれたところに、国の重要文化財「那須家住宅」があった。一般に「鶴富屋敷」とも呼ばれて、寝殿造りで、かつてはこの地方の代表的民家といわれる。

この古い家に住んでいる那須正敏さん（五六歳）は、鶴富姫から三一代目にあたるという。本人は「周囲の人がそういっているだけで、私は別に……」という。この屋敷は午前九時から午後五時まで、外から室内が見えるようにしてあり、案内の小さい自動マイクも置いてある。この家に住む那須さんによると、文化庁から室内を乾燥させて、保存を良くするために、できるだけマキをイロリで使うようにとかの注文があるという。本当は文化財は返上したいんだと、本音を言っていた。

また、東側には「鶴富姫の墓」とされる一米ぐらいの多宝塔や西隣には村立歴史民俗館、さらに西側の森には「鶴富化粧の水」、「広島県宮島から勧請した平家ゆかりの厳島神社」が祭られている。

椎葉の山里は、古くから平家落人の伝説がある。「寿永四年の昔、壇の浦の戦いに敗れた平家の残党が四方に隠遁しその一部が豊後玖珠の山中を経て、山深き大峻嶮の日向の国椎葉山中に分け入り、ここを隠れ里と定めたり」（「椎葉山根元記」）と、伝えられている。

有名な鶴富姫の哀話を紹介しよう。「豊後の国から山をつたって椎葉の奥山に逃げてきた平家の落人たちは、わずかばかりの畑をたがやして、ようやくその日その日をおくっていた。ところが、この落人たちのことがいつしか鎌倉幕府の知るところ

となり、四国の屋島の戦いで扇のかなめを射あてて名声を博した那須与一宗高の弟郡須大八郎宗久は、幕府の命を受けて椎葉山の落人の討伐にやってきた。落人たちのなかには最後の力をふりしぼって戦ったものもいたが、多くはむしろこの山中で平和に暮らしたいと願うのであった。

大八郎も、ついさきごろまで京の都ではなやかな生活を送っていたこの人たちに同情して、幕府には落人を討ちたいらげたと報告し、かれらを許した。大八郎は平家の氏神である厳島神社をまつったり、農耕技術を教えたりしているうちに、落人のなかの鶴富という美人と恋仲になり、鶴富を妻として平和に暮らしていた。ところがやがて幕府の命で鎌倉へかへることになった大八郎は、鶴富に天国の名刀を形見にあたえ、すでに身ごもっているかの女に、生まれた子が男なら自分の生国下野によこせ、女の子であったら椎葉で育てよ、と言いのこして出発した。泣く泣く大八郎を見送った鶴富は、まもなく女子を生んだ。かの女は椎葉でこの子を育て、やがて養子をむかえて那須姓を名のらせた。そのあと続いて、今日鶴富屋敷に住んでいるのはその子孫であると伝えられている。ひえつき節には大八郎と鶴富のことがうたわれているというが、これは後の時代になってつくられたものである。主食の稗をつくときにうたったものなのであろう。」（「宮崎県の歴史」山川出版）。

もともと日向は、中央からはなれた内陸の流刑地として、有名無名の罪人がこの地に遠流されたのである。椎葉の山里の鶴富姫の哀話は、「先祖を悲劇の主人公と信じることで、平野に住む人間に対抗するための心の支えをはぐくんだ」というのが心理的根拠になっていると考えられる。

それにしても、落人部落はなぜ、そろって「平家」であるのだろうか。全国各地に平家谷伝説があるのだろうか。それは、一説には辺境の土地を訪れた盲目の琵琶法師たちによって弾き語った平家物語がヒントになったのではないかという。